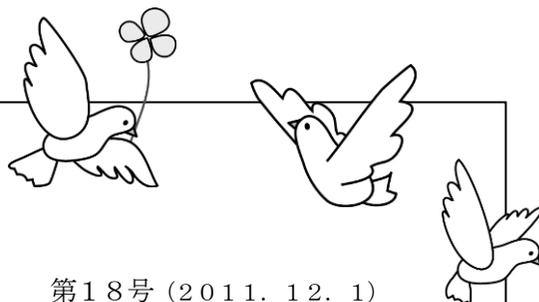


群馬医療福祉大学図書館報



昌賢だより

第18号 (2011. 12. 1)

発行：群馬医療福祉大学図書館
群馬医療福祉大学学生図書委員会

— 巻頭言 —

本は、著者のこころとの出会い



— 『死をみつめる心—ガンとたたかった10年間』 —

看護学部長 福山なおみ

青年期は、自分の生き方や価値を見つめ、人格を形成する過程で大切なときです。この時期に出会う本は、一人の人間として、看護専門職者として、自らの生き方を支え、人生の指標としても大いに役立つものと思います。

わたしにとり「本」は、こころ豊かにしてくれる《人生の師》であり、《こころの友》といえます。わたしが「本」と出会い、最も嬉しいと感じるのは、模索しているときに、著者の書かれた内容と、自らの思考や感情が重なり合ったときであり、共感し、勇気づけられ、励まされ、支えられると実感するときです。そこには、「本」を通して交わされる著者とわたしの「対話」・「響き合い」があります。できることならば、もっとこの人の考えを知りたい、そうした思いが、そのテーマに対して興味や関心をもつきっかけとなるのです。

わたしが看護学生だった18歳のころ、恩師が薦めてくれた1冊を紹介したいと思います。岸本英夫氏の著書『死を見つめる心—ガンと

たたかった10年間』講談社 (1973) です。著者は、宗教学者であり、米国スタンフォード大学滞在中に、がん (黒色腫) の宣告を受け、10年間の壮絶な闘病生活を経て他界されました。著書の中に「人間が生きていくためにこころを煩わすべきは、死の問題ではなくて、この大切な人間の命を、どうするか、どう生きていくか、ということ、命のある限り、その最後の瞬間まで、どう生きていくかということ、常に考えなければならないということ、常によりよく生きるためのケア」という一節があります。

この命題は、私の看護人生において、ずっともち続けることとなります。それは、病をもち苦悩する人、死に逝く人のこころに添うことであり、ケアする看護者としての自分の生き方を問うことです。そして、そのときいつも“岸本氏のこころ”を思うのです。

看護専門職を目指し学んでいる学生の皆さんたちには、“よりよく生きるためのケア”とはどのようなことなのか、を考えさせてくれる1冊です。

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

— 先生からのお勧め本 —

前橋キャンパスの先生方にお薦めの本や読書観等を教えていただきました。



— 心を揺さぶることば『金子みすゞ童謡集』 —

推薦者：高瀬智津子先生

高校時代に高村光太郎の『智恵子抄』に出会ったのを契機に、私は短歌や和歌、詩作を趣味としてきました。季節の移り変わり、道端の草花に生命を感じ、自ずと植物や小さな生き物と一体化し、思いのままに自分の気持ちを表現することの楽しさを見つけたのです。

そんな私の心にあるとき衝撃を与えたのが、金子みすゞさんの「鯨法会」です。親を失くした鯨の子がひとり、浜のお寺で鳴る鐘を聞きながら「死んだ父さま、母さまを、こいし、こいしと泣いてます」という、みすゞさんの心が生み出したことばに身震いするような感動を覚え、自然界はすべてのものがつながっ

ていることをあらためて実感したのです。

金子みすゞさんは、明治36年(1903)年、現在の山口県長門市仙崎に生まれ、二十歳までをこの海辺の自然豊かな土地で過ごしました。彼女の詩に心揺さぶられるのは、平易なことばでありながら、そのひとことひとことにひそむ魂の哲学のようなものが、人の生き方、価値観を刺激し、心の目で出来事の本質を観、感じとることの大切さを教えてくれるからではないでしょうか。

一人でも多くの方が金子みすゞさんに出会ってくださることを期待しています。



— 『僕を探しに』 —

推薦者：西村昭徳先生

原書のタイトルは「The Missing Piece」となっています。主人公は、自分自身の“足りない何か (missing piece)”を追い求める旅に出ますが、様々な出会いを通して、“足りない何か”に対する主人公の認識が変化していきます。主人公は、自分に“足りない何か”があることの意味を見出したようです。私たちが生きていくということは、自分自身の“足りない何か”を追求していく道のりなのでしょう吗？そして、自分らしく生きるとは、いったいどういうことなのでしょう吗？私自身にとってこの物語との出会いは、—

『To be cured is to be yourself.』という臨床心理士としての臨床観に至るきっかけになりました。

心あたたまるイラストと含蓄のある文章がとても魅力的で、長きに渡り、幅広い年齢層に親しまれてきたイラスト物語です。特に、自分とは何かというテーマを模索する青年期を生きている皆さん、そして、自分らしく生きることを支える立場(対人援助職)を志している皆さんには、この物語が投げかける人間にとっての根源的なテーマに触れて欲しいと思います。



「みかんの島」の介護日記

— 23歳のリエとナオミが挑んだ不器用で誠実な福祉の道 —

推薦者：熊谷瞳先生

ある休日、何気なく見ていた番組で、山口放送制作のある番組が出版されると知った。それは、過疎化の進んだ瀬戸内の島で、リエとナオミ、どこにでもいる24歳の女性二人が、「作業ではなく介護がしたい」と、心の通う介護を目指して介護事業所を立ち上げ、理想の介護を追及していく姿を描いたドキュメンタリーであるという。当時、介護福祉士として現場で働いていた私は、同じ年齢で、同じ介護の道を進む二人が何を考え、どのような経験をしているのかを無性に知りたくなり本屋に駆け込んだ。

施設での介護を経験し、理想と現実のギャップとジレンマを感じていた自分にとって、リエとナオミが貫き通す「人間らしい温もりがある介護」には衝撃を受け、憧れすら感じ

た。二人は、「介護」は、おむつを交換し、食事を食べさせ、お風呂に入ってもらふこと・・・ではなく、その方の日々の生活と人生を大切にしながら、できないことを手助けしていくこと、つまり、相手の気持ちを十分に理解し、一人ひとりに合った方法とタイミングで、「今」を手助けすることが「介護」であると言っている。

介護は、十人十色であり、答えは高齢者や障害者自身が決める。だからこそ、介護に携わる我々の意識や姿勢は直接評価される。リエとナオミの介護を通じて、二人の介護に対する熱い想いと姿勢に触れ、「職業観」や「利用者本位」という職業倫理についてじっくり自分と向き合ってもらいたいと思う。



— 『仕切りたがる人 — 相手を見抜くタイプ心理学 — 』 —

推薦者：島内晶先生

私たちは、日常生活の中で誰かと接する時、特に初対面であったり、出会ってから日が浅かったりすると、この人はどういう人なのだろうと、お互いを探りながら、そして、ある程度の「タイプ」に分けて、その人を理解しようとするのではないのでしょうか。

この本では、いわゆる「関わりにくい人」をタイプに分けて、例とともに、その人への接し方が書かれています。本書は、ビジネスに関わる人向けに書かれたものではありませんが、読み進めていくうちに、「こういう人いる！」と納得してしまいます。例えば、「他人をすごく気にするタイプ」、「役人のようなタイプ」、「空気の読めない (KY) タイプ」、「決

断できないタイプ」、「些細なことを根に持つタイプ」などなど、自分の身の回りを見回してみると、意外と身近にいるのかもしれない。

また、「仕切りたがり度」診断テストや「KY (空気が読めない) 度」診断テストもついていきますので、自分を見つめ直すきっかけや、新たな自分を発見するきっかけになるかもしれません。

本書は、人との関わり方のヒントが欲しい人、パーソナリティ心理学を少し異なる角度から勉強したい人に、是非おすすめしたい一冊です。



— 『未曾有と想定外 東日本大震災に学ぶ』 —

推薦者：久保田米蔵先生

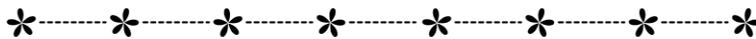
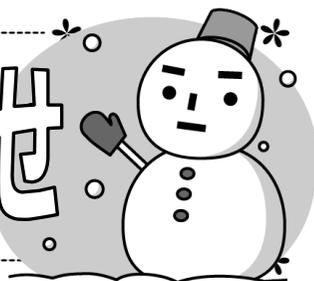
東日本大震災は、大地震によって発生した大津波と、そのために発生した原発事故が大きな災害を引き起こしました。私たちは、この災害は、人間のかかわり方によっては、防いだり、被害も少なくすんだのではないのかという素朴な疑問がわいてきます。タイムリーにこの問題にヒントを与えてくれる著書だと思います。「未曾有」とか「想定外」ということばで片付けることでいいかということも感じます。「原発事故調査・検証委員会」委員長である著者はこの本の中で、その二つのキーワードを「失敗学」の立場からわかりやすく解いてくれます。・安易に使われる「未曾有」

ということばは「あいまいさ」の中で物事の本質を隠してしまう。・「人は忘れる」という大原則があるとのこと。

「原子力は絶対安全」という神話の中で作られていった原発は「想定外」ということばで免罪になるわけではない。原発と「想定外」においては「見たくないものは見えない」「聞きたくないものは聞かえない」という原理が働いている。しかし「想定する」という責務が専門家にあったはずだ。読んでこの震災を、今後の日本の転換期とするよう提案している著者に共感できます。



図書館からのお知らせ



★ 2011年4月1日より

系統別看護師国家試験問題

+ 保健師国家試験問題 Web

を契約しました！ (藤岡分館のみ)

同時アクセス数：教員用アプリ3台 + 学生用アプリ3台

認証方法：教員用（ID / パスワード認証）、学生用（IPアドレス認証）

使用後は必ずログアウトすること。不正終了をすると一定時間ログインできなくなります。

10年分の過去問題、模擬問題や系統別問題集を収録し Web 上で解答・採点ができます。

オリジナル問題集を作成し、保存した問題集を印刷することも可能です。





— 本 と 私 —

前橋キャンパスと藤岡キャンパスの学生の皆さんに
日ごろ読んでいる本やお薦めの本、読書観等をそれぞれ教えていただきました。
この機会にお薦めの本を読んでみてはいかがでしょうか？



— 『実験犬ラッキー』 —

社福1年：福原一馬

医療、化粧品、薬品等を私達は、こうした多くの資源を日常的に用いています。

それは、私達が生活をしていく中で、又、生物として生きていく上で必要であり、重要な物です。

しかし、だからこそ環境や人体にとって害がなく、安全な物でなくてはなりません。原材料や配合なども緻密に考えられ、多くの人間が携わっていることで、そういった害になることをなくしていています。

けれども、それはあくまで理論や予想の限りでの事、使用して本当に大丈夫なものなのか、それは実際に使わない限り絶対とは言えません。

確認ある安全性を知る為には実験を行います。ヒトの使う物の安全性の確認の為に犬などの動物を実験体とした“動物実験”なのです。

ある日、お店の前に現れた痩せこけ汚れたハスキー犬「ラッキー」、飼い主が来てくれるまで世話をし、ラジオで放送して遂に現れた飼い主は動物実験センターの人々。ラッキーを普通の犬としてあげる為に奮闘していく・・・。

一頭の実験犬の実話の話を綴ったこの本で私は、動物実験の存在を知り、こうした動物達の命を犠牲にして生きているのだと感じました。

動物実験は絶対いけない、これが私の思うことです。しかし、薬品が害なく有効な効果を持つのか、医療の発展、学習の為に、行わざるを得ない事でもあったのかもしれません。これの善悪は、感情的に言えば悪な事としか思えません。けれども、正直な所私にはわかりません。

答えはわかりませんが、私達ヒトは、多くの動物の命を自分達の為に切り捨ててしまった事を理解し、どうすればいいか、何が出来るか、少しでもなくしていく事を考えていく、動物達の犠牲を忘れずにいる事は当然ですが、大切だという事をこの本を通じてわかることができました。





— 私の進める本 —

社福2年：児玉尚子

私は今とても本を読みます。純文学から哲学書まで読んでいます。その中で読書が苦手な人にも一度は読んでほしい本を紹介します。

それは石田衣良さんが書く「池袋ウエストゲートパーク」のシリーズです。1冊の中に短い話がいくつか書かれている短編集タイプのもので、ストーリーは池袋に店を構える果物屋の息子、主人公真島誠（マジマ マコト）が様々な事件、問題を解決していくものです。主人公は「池袋のトラブルシューター」

と呼ばれており町のカラーギャングのキングや警察、暴力団などの人々とかかわり事件の真相を暴きます。1話1話が読みやすく、脇役も個性的で飽きません。また、現代の社会の問題も話の中で挙がってくるのでリアリティも感じることができるでしょう。映像化もされているのでそちらを見てから原作を読んでもいただいても楽しめることでしょう。これがきっかけで皆さんのなかで少しでも読書が面白そうだと思っていただけたら幸いです。



— 『図書館戦争』シリーズ —

看護1年：中村りさ

「こちらは関東図書隊である！」

これは物語に登場する堂上篤の台詞です。第一巻の重要なポイントとなる言葉で、私はこの言葉のシーンがとても好きです。

図書館戦争シリーズの舞台は、年号が正化と呼ばれる時代の武蔵野第一図書館。本の検閲が行われている時代で、図書館もその検閲に対抗するために図書隊と呼ばれる武装組織を編成。訓練ばかりの日常から、ちょっと気になるチビと笑い上戸の上官、優等生と美人の同僚が集まって、なんだか毎日楽しそうなことが次から次へと起こっ

て・・・

図書館の魅力をこれでもかと感じさせる巧妙なストーリー展開、すぐそばから登場人物の声が聴こえてくるような文章にどんどん惹きこまれ、ページをめくる手が止まりません！こんなにワクワクする本は、世界にこのシリーズのみ！

アクションあり、笑いあり、涙あり、もちろん恋愛要素もあり！生きた活字が詰まった一冊です！みなさんも是非、一読あれ！





— ターニング・ポイント —

看護2年：小林信之

論文が好き、古書が好き、絵本が好き、漫画が好きなど、人はそれぞれ好きな本のタイプが違います。

私はその中で小説が特別好きというわけではありませんが、どちらかというとき好きという人間です。なぜなら、物語性が存在するからです。私は高校生の頃に物語を創作することに憧れました。そして、物語を創作するにはどうしたら良いかと考えたところ、小説を読むことが一番であると思ったのです。なぜなら、一つの物語の中には、

物語を創作するうえでの、たくさんのポイントが隠されているからです。そこで私は、ただ本を読むだけではなく、それを何かに生かすことができるということは、とても良いことだと思いました。

従って、読書を趣味とすれば、たくさんの方に繋がる道を得ることになるのです。この道をつくるのが本の素晴らしさだと私は思います。

数多のことに目を向ける、その「分岐点」に本が存在するのかもしれない。



— 『洋平へ—君の生きた20年と、家族の物語—』 —

社福3年：中村成美

私が紹介する本は、佐々木博之さんと志穂美さんのご夫婦により、実話をもとにして書かれたものです。2人の中には3人の息子を授かりますが、長男は重度心身障害、二男は高機能自閉症、三男は知的な遅れもともなう自閉症。産まれてきた子はみな障害児でした。その生活は辛く涙する日もあり、志穂美さんは「ホントウだったら」と歩いたり、しゃべったりする障害のないわが子の姿を想像してしまうと書かれていました。しかし、ただ辛いだけではなく、子供たちの笑顔が見られたり、子供たちの優

しさに触れたり、日々成長していく子供たちとの生活が楽しみであり、幸せであるということを書いていました。また、「障害というものを通して、人が見えていない景色も見ている。この子供たちとの日々が私を私にしてくれた」と話している志穂美さんは本当に強い方だと思いました。たとえ障害をもって産まれてきても、大切な家族としてどれほど愛おしいものなのかということや、家族を結ぶ強さを感じ、感動もありとても心が温くなる1冊です。皆さんもぜひ一度読んでみてください。





— 『悪意』 —

社福1年：阪本智行

『探偵ガリレオ』シリーズや『新参者』を始めとした多くの作品がメディア化され、東野圭吾の名前に聞き覚えのある人も多いかと思います。加賀恭一郎シリーズ第4弾にあたるこの本は、そんな彼の作品を読むならこれから、との呼び声が高い一冊。

1人の大人気小説家が殺され、容疑者として捕まったその友人、野々村。ストーリーは彼の手記と、主人公加賀刑事の「記録」「独白」「回想」。そして「真実の章」から成ります。ときにミステリーの禁じ手に挑み、叙述トリックを自在に操る東野圭吾のこと、勿論ここには畏が・・・と考え出し

たらそこはもう彼の掌の上。考えて読む人、推理物が好きな人ほど最後には裏切られるはず。

そしてどんでん返しの鮮やかさにばかり目がいきがちですが、刑事加賀の展開する捜査、推理の描写も秀逸なんですよこれが。決して敷居は高くなく、それでいてその緻密さはまさに本格推理小説。

推理物好きなら推理物好きでいて良かったと、推理物が苦手なら好きになれる、そんな本です。是非どうぞ。



図書館HPを上手に活用していますか？



【情報検索ポータル】とは、調べものに役立つ情報を探すための総合案内のことです。図書館では学術的に有効な文献や情報を入手するために、独自のデータベース集を作成しています。皆さんの様々な情報検索に対応できるように契約しているデータベースも沢山ありますので、ぜひ図書館資料と組み合わせて上手にご活用下さい。

《お薦めデータベース類》

Cinii (サイニ) / e-Gov (電子政府の総合窓口) / 医中誌 / MAGAZINEPLUS
ブリタニカ・オンライン・ジャパン / メディカオンライン / 法令データ提供システム 等



図書館報第18号をお届けします。

分館が藤岡キャンパスに開館してから2年がたちました。今回の原稿から両キャンパスの学生に原稿執筆を依頼するなど、少しずつではありますが本館と分館の連携も形になってきたような気がします。

最後に図書館報の発行にあたり、お忙しい中原稿の執筆をしていただいた方々に心より感謝申し上げます。

(図書館)

